

頃は嘉永七年寅霜月五日（十一月五日）西暦一八五四年十二月二十四日）に大地震大津波があり誠に恐ろしい出来事であった。

四日（太陽暦十二月二十三日）朝五つ半（午前八時頃）に大地震、四ツ時（午前九時十時頃）から八つ半時（午後二時頃）までに高潮が来て津波が上ってくるかも知れないと村の皆が心配し、諸道具、着衣類すべてを山へ持ち出し、それぞれ用心していたところ何事もなく、それで五日（十二月二十四日）朝より諸道具、着物を家に戻し家を片づけおわたところの日の七ツ時（午後四時頃）大地震が起こり皆が心配していたところに南西の方向で山も崩れるようにドンドンと鳴り終わったあとに津波が上がってきた。この波は引くとまた二度目の波が上がり、その波が引くとまた三度目の波が上がり、この波が一番大波であり誠に恐ろしくその様子はどうも文字には書けないものであった。

一五日八ツ半（午後二時頃）より清七は和田の祭礼のために御坊へ仕込みに行っていたところ、大地震がゆり出しそれよりすぐさま仕事をやめて帰ろうと名屋浦の天田渡し場へ行った折りに、川口より津波が上がり、渡し船が向こう岸へ着く手前で津波に出合い、乗っていた三人、船頭の天田伊三郎の四人が矢のように野口まで流された、船頭の伊三郎はついに水死し、残り三人が助かった。渡し場にあった小舟六、七艘は残らず岩内や野口まで流れていった。

その有様を清七が見たので直ちに名屋浦（現御坊市名屋町）へ逃げ込み、持ち合わせていた荷物を捨てて、風呂敷の中の札二枚入れていた紙入（財布）からお金を四百文取り出し懷中に入れ、御坊あたりへ向かう途中、名屋浦で紙入れを落とし、拾おうとしたところ西の方向から波が上がり、これはたまらんとそのまま放っておいてそこから名屋浦の御宮（船付き明神）を目指し、田地を横切り東へ走り、すぐさま宮へ上り戌亥（北西）の方に下がり松（枝の下がった松）があり、すぐさまその松へ登ろうとした時に足元を一尺（約三十センチ）ほどぬらしたので松の枝へ登り、念仏を唱え、生きた心地は少しもなく不安に思っていた時に、波は六尺（約二メートル）になり、茶挽（ちゃめん）あたりまでのぼり、それより引き波になった。その時、松の枝で助かった人は私と名屋浦の佐野屋殿とふじ田甚吉の息子浅吉殿の三人であった。

波が引いた頃、日は西に入り（午後五時頃）夕方になっていた。不思議なことにこの神前の石灯籠に燈明の光が見え誠に不思議なことであった。それから松枝を下り、三人連れて源行寺（げんぎょうじ）の方に向かったが、道も分からず田地畑を横切り源行寺南まで行った。源行寺の本堂に名屋浦の人々が集まって念仏だけを唱えていた。

ここで兩人に分かれ私は下野に向かったが、おせい殿はどこかへ逃げて空き家になっていた。そこから紺桶殿へ行ったところ、おせい殿に出会い、いままでの様子を話し出そうとした時にまた南の方で波の音がし、すぐさまおせい殿と二人連れて西町へ逃げ込み、そこから御堂（日高別院）へ逃げ込んだ時に波は御堂の裏門まで来た。そのため本堂へ上がってみると数百人の人々が念仏を唱えている間にも地震がたびたび、夜の四ツ時頃（午後九時十時頃）の月の入りにまた地震がゆった。この地震は本堂もゆりつぶすほどの大地震であった。

その時私が思ったことは、このままではとても命はないだろうから、まず小松原（現御坊市湯川町）に行き母親兄貴にも会いたく思い、まずおせい殿にわかれ、小松原に行くうちにも地震がたびたびゆった。

御坊、新町、嶋村あたりの人は皆道成寺会下の法性寺（鳳生寺か？丸山北東の愛宕山にある）または丸山（現湯川町）へ登っていた。私は小松原の兄貴の家族と共に畑の中でむしろを敷いて念仏を唱えていた。

その夜明けの七ツ時頃（午前三時十時頃）より私は自分の家族が心配で小松原の家族と別れ、藤井村（現御坊市藤田町）の渡し場に向かい、着いた頃に夜が明けた（午前七時頃）。その渡しをわたり野口村高森（現在の小森）岩内を通り、岩内と天田の間の田畑の中に波が打ち寄せ船が流れ込んでいた。そこから木瓜坂（こと

のさか)を越え湊(現塩屋町)まで来たところ、このあたりは津波で散乱してしまっていた。家や木、家財道具が数々流れ道も分からないほどになっていた。このあたりで村人三人に出会い、まず家族が無事であることを聞き安心した。

まず家族の老人はどこに逃げたのかと尋ねてみたところ、皆は上の芝にいと聞き、上の芝へ登ってみると、文次郎殿たちが畑の中に集まっていて、私達は顔を見合わせ物も言わず泣くばかりであった。その日の八つ頃(午後一時〜二時頃)に親仁(おやじ?父親か)の平左衛門殿を野口村田淵健庵殿が迎えに来てくれ野口へ預かってもらった。前老母は荊木村(現日高町)の森伝太夫殿方へ預け、家族は私とお房、桑吉(くめきち)、敬二郎と四人連れで文次郎殿の世話になり、森屋新兵衛殿と小さい家で同居した。その家は小さかったので七八日ほど住んで、ふじ田万平殿へ移った。万平殿は藤井村で奉公しているのでその家は空き家になっていた。そのため文太夫殿と同居し三十日ほど住んでいた。それより大手お梅茶屋の古家を買取り、仮建て普請し、まず店を出し極月(十二月)十三日に引っ越し、親仁、老母引き取りめでたく正月を迎えた。

しかし、店は小屋のようで商売はしにくかった。そのため、安政二年五月我が家を普請した。家屋敷の普請の費用が難しくなったので、親類や馴染みの方にお願ひして資金を調達した。

援助控え(省略)

右のようで誠にありがたき幸せで喜ぶべきことであつた。

一津波で流れた家屋数は 数百十軒

流死人数 十一人

南は才一郎殿鹿嶋屋より南へ流れ残る

東は才兵衛殿

小堀円満寺あたりの小西 治郎衛門殿東へ残る。

また、宮下清助殿より橋詰めまで流れ西は道より西は残る。奥は森岡うばへ橋まで家木流れよる。

中奥は大行寺山、にぎり池下まで家木流れよる。

(翻刻 塩崎登予彦)

(注釈 中村重久・阪本尚生)

(監訳 広野雅昭)

(現代語訳 阪本尚生)